

## 弔辞

著者	石川 淳志
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会労働研究
巻	29
号	3-4
ページ	1-3
発行年	1983-03-20
URL	<a href="http://doi.org/10.15002/00015379">http://doi.org/10.15002/00015379</a>

# 弔 辞

社会学部長 石川 淳 志

一昨日五月九日夜半、私達法政大学社会学部関係者は、再び悲しい報せに接しなければなりませんでした。つい先日、かけがえのない同僚を失ったばかりであるにもかかわらず、またまたこの日、日頃敬愛惜く能わざる吉田先生の突然の御逝去の報を受け取らなければならなかったからであります。

思えば吉田先生とは、去る三月末日、先生満七〇歳の定年御退職により、ひとまず御別れたばかりでありました。しかし、現役を退かれたとはいえ、先生は、益々意気軒昂、一段と社会的な御活躍の機会を拡げられており、私達後輩一同は、ただ感嘆と尊敬の眼をもって、先生を仰ぎ見ておりました。それ故また私達は、先生の御健康を、心から祈念してはおりましたものの、まだまだ親しく先生の御指導を受けることができるものと信じて疑わなかったのです。その意味で、先生のこの度の突然の御逝去は、まことに惜しみてあまりあるものといわなければなりません。

かえりみれば、吉田先生は、一九五五年以降法政大学社会学部において非常勤講師として、社会保障論および社会

政策史の講義を担当され、さらに一九六九年よりは、社会学部専任教授として、本年三月に定年退職されるまで、引き続き二七年間にわたって勤務してこられた方であります。

この間、社会保障関係の諸領域における実に多彩な社会的御活動については、枚挙にいとまありません。

また先生は、常に具体的現実との触れ合いの中で理論を研磨され、現実が提起する社会的諸問題の具体的解決策を常に志向しておられました。こうした先生の学風に裏付けられた、社会保障論や現代社会論などの御講義は、多くの学生に、多大の感銘をあたえずにはおかないものでありました。私達の耳にも、過日、先生が最終講義の際に、情熱をこめて語りかけてこられた、高齢化社会の問題に関する警鐘が、今も鮮明に鳴り響いております。

私達は、先生が心から愛し、また、長年にわたって精魂を傾けてこられた法政大学社会学部の教育と研究を、先生の御遺志を受継ぎながら、一層発展させる決意しております。

先生どうぞ安らかに御休み下さい。先生の御冥福を心から御祈りして弔辞といたします。

一九八二年五月一日